

ひもじさの記憶

—— 集団疎開の頃 ——

富田 仁

戦雲急を告げる昭和十九年の夏、政府は大都市の児童を学校単位で地方に移住させるいわゆる集団疎開を実施した。

当時、国民学校（現在の小学校）六年生だった私は、とくに地方に縁者もないために、集団疎開で、戦火迫り来る東京を脱出するほかに、上野駅から級友たちとともに列車に揺られて福島県の田舎町に向った。野馬追いで有名な城下町、中村（現・相馬市）が私たちの疎開先であった。疎開児童はその町にある寺院と旅館に分宿することになった。

私は二十名ほどの仲間と小さな旅館に寝起きすることになった。四年生から六年生までの雑居生活だった。朝はラッパで起床し、体のうち食事を摂り、登校する日々が始まった。学校は城址にあった。男子校と女子校が道路を隔てて相對峙するように建っていた。

私は男子校の教室で疎開児童だけの授業を受けたので、とくに地元の子ともたちの接触はなかったが、それでも男子校の教員で蛇を食べるといふ鋭い眼つきの先生のことを覚えているところをみると、たまにはなんらかの交渉があったのかもしれない。

疎開当初は親許を離れたさびしさはなく、むしろ仲間との共同生活を楽しむという気分だったが、次第に東京のことを思い出すようになっていった。それは秋という季節の訪れのためでもあったろうが、それ以上に、食糧事情が日毎に悪化していき、慢性的な空腹感にとらえられるようになったことに深いかわりがあったようである。

初めの頃は、旅館で出してくれる食事はどんぶりに山盛りであったが、いつしかご飯の山はその標高を低下させていき、火口のよう

にへこんでしまった。私たちの話題は、さもしいことに、たえず食べ物のことになった。

手紙を書いて家から食べ物を差し入れてもらうということはだれでも考えたが、郵便物はすべて同宿の教師が寮母の手を経て渡されていたので、食料品が送られて来た場合、分配を強制されたのである。ときたま面会に東京からやって来た親がそと子どもに渡していくといふふうなことでもなければ、ひとり満腹感にひたることはできなかった。それに、面会もだんだん交通事情が悪化したことでむずかしくなり、間遠になった。私たちは食べ物獲得の手段として、町の幼い子どもと親しくなると、なんでもよいから食べ物ももらうことを思いついた。もつとも、最初のうちはそんなことも効を奏したが、永くは続かず、またもや飢餓状態が深刻になっていった。

秋祭りの日だったと思う。戦時下のために祭典はなにも行なわれなかったが、町の有力者たちが疎開児童を何軒かの家に招いてたっぷりご馳走してくれた。私たちは久しぶりに満腹して宿舎に戻ったが、そこでもおいしいご馳走が待っていた。私たちは思わず満腹感を忘れたかのように、その夕食をむさぼるのであった、まるで餓鬼のように……。

しばらくすると、動くに動けなくなった

り、腹痛を訴えたり、吐いたりして、大混乱が起きた。そんな私たちの様子を見ていた教師は困りはてたようだが、適当な処理をとら、一段落したあと、町はずれの畔道まで私たちを散歩に連れ出してくれた、哀れな餓鬼どもに教師はおそらくはあきれ果てたことだろう。

食事のたびに出るおかずは、いなごとりに行くと、毎食いなごであり、のりを煮れば連日のようにのりである。主食も白いご飯は拝みたくても拝めず、大豆や大根やじゃがいもなどが米の量より多いまぜご飯である。そば、うどん、すいとんなど、いわゆる代用食も珍らしくない。

やがて冬。東北の厳しい寒さが私たちを宿舎にとどめるようになった。外出することは通学以外は稀になり、毎日のように陽光のいっばいさしこむ二階の廊下でぼんやりと時間を過したものであった。肌着にたかった頭をつかまえ、マッチ箱に入れて喧嘩させて遊ぶというふうなことの合間、私たちはどうしたらうまく宿舎をぬけ出した東京までたどりつけるかといった話題に熱中した。実際に、二駅先まで歩いて上野行の列車に乗ろうとしたところを保護されて連れ戻された下級生が現われ、逃亡のむす

かしさを思い知らされた。

そんなある日、とんでもない事件がもちあがった。私たちの宿泊している旅館にはときたま近在の鉱山の技師が泊ったが、ある晩、その泊り客に出されたお膳からおかずの焼き魚が紛失したのである。旅館の主人が犯人は私たちの中にいると言いついたので、寮母は真相究明に乗り出し、一策を思いついて私たちのひとりひとりに大きく口を開かせ、口臭をかぎ、犯人をつきとめようとした。その夜、私たちの食卓には魚は全然出ていなかったのである。思えば、なんと哀しい事件だったことだろう。犯人は始終東京に帰りたいと言っていた四年生の少年だった。間もなく、病気ということ、その少年は東京に戻された。

疎開生活はそんな空腹劇ばかりが続いたわけではない。寝小便が発見されたために腕白小僧がおとなしくなったり、教師が未亡人の寮母に失恋してノイローゼになって帰京したりするような事件もあった。だが、概して言えば、ひもじさの記憶がことのほか集団疎開の日々のそれとしてよみがえってくる。このひもじさの体験は私の人間形成の上に大きな影を落しているように思われる。

別のある日、階下から芳しい匂いがして腹をすかしきった私たちを刺激し、思わず「腹がへった！ 腹がへった！」と足ぶみして叫ばせるといふ出来事が起きた。宿の主人が駆け上って来た。その結果、私たちは大目玉をくらう破目になった。

食べられるものならなんでも食べた。密柑は皮まで食べたし、波柿も平気で食べた。そればかりか、歯みがき粉さえ食べる剛の者まで出た。

集団疎開、それは集団生活の強制であり、

ひもじさの記憶につきまとわれる日々であった。食べ盛りの少年の時期に「ひもじさ」を体験させられたことは、ある意味では人生きるVこととはなにかを考えさせられたことでもあったが、そのような人生論的思考の機会を少くすくにあたえられることよりは、むしろすくすくと成長できるような人、十分な栄養をあたえられる方が遙かに私の人生にとって幸福であったと考えられてならない。

すでに娘もそんな時期の私の年齢を越えたが、見事に成長していく娘を見ると、あの種の羨望と、餓えを知らない時代がいつまでも続いで欲しいと願う気持ちが湧き上ってくる。戦後三十五年、ひもじさのこのような記憶が私の脳裡から消えていく日があるのだろうか。

(一九八〇年一月七日)